

2016

友引町内会 通信

Vol.201

11



秋深き 隣は何を するひとぞ

松尾芭蕉

一般的には、秋も深まり静寂の中にいると、隣人がたてる物音が自然と聞こえてきて、何をしているのだろうと想像してしまう、という感じでしょうか。実は大阪で芭蕉の弟子たちが催した俳句会を病欠したときに、秋深くなってみんなで何してるの、俳句会？主席できなくてごめんね、という意味で寄せた句だとか。

普段着のわたしたち



「天然たいやき」
ってなんだ！私が最
屑にする蕎麦屋のお
向かいの店です。

以前『♪およげた
いやきくん』が流
行った頃、お店に「ア
イスたいやき」と貼り出しがあ
り、私はアイスクリームが入ったそれと思
い即買いました。しかし、あんこの普通の
たいやきがただ冷蔵庫で冷やされたもので
した。今回も私は不審に思います。

俊徳丸

胃の調子
が良くない
ので、【重
曹水】を飲
んでいます。
ちょっ



としよっぱいです。これで胃が良くなって
くれるといいのですが・・・。

露の身

映画『シン・ゴジラ』の音楽も素晴らしいのでサントラも買いました。観にいかれ



てない方は早
めに行かれ
ることをオ
ススメいた
します。

征阿



今年も「ホトト
ギス」が咲き、秋
を感じています。
花びらの斑点模様
が野生のほととぎ
すの胸の羽毛と似
ていることから名
付けられたそうで

す。一輪挿しでもサマになる風情のあるお
花です。花言葉は「秘めた意志」、「永遠の
若さ」。あやかりたや〜。

訶梨帝母

近所にレンタル
サイクルのお店

On-Off さんがあ
ります。週末には
若者が車で来
て、ここから北へ



自転車で颯爽と走り出すのです。道路がよく
整備されていて、信号が少ない。自転車
乗りには絶好のロケーションだそうです。

私？ いや、夜中に足がつるので芍薬甘
草湯とバンデリンを手離せないのですよ。
それなのにやれって言うの？

迷走坊

『友引町内会通信』はスマートフォンや
タブレットでもお読みいただけます。

<http://www.daigoji-temple.jp/> で検索して
「友引町内会通信」をクリックしてくださ
い。遠くにお住まいのご家族の皆さまにも



読んでいただ
けますように。

寺務局

慶応三年十一月十五日、坂本龍馬の命日。
「今一度日本を洗濯致し候」と幕末の時代を疾走し、大政奉還を成し遂げ、その一ヶ月後、京都で凶刃に倒れます。その日は龍馬の誕生日だったとか。誕生日と命日が同じとは：オボエヤスイ（これ、太宰の話でも書いたような）。

新しき日本を夢見て、明治を見ずして死んだ龍馬。今さらここで龍馬の活躍っぷりを述べるつもりはございません。龍馬について私がかねがね思っていた事を書いてみましょう。題して、
『龍馬が龍馬でなかったら』

「龍馬」「竜馬」。字ヅラといい、音といい、宜しき名だと思えます。もし彼が「龍馬」という名でなかったら、同じ功績で違う名だったとしたら、現在までこのように讃えられるのでしょうか。

江戸中期の俳人

に堀内雲鼓という方がいるそうです。あえてルビは



ふりません。普通に音読みで読んで下さい。例えば「坂本雲鼓」だったとしたら、司馬遼太郎は『雲鼓がゆく』なる小説を書いたでしょうか。熱烈龍馬ファンの武田鉄矢はコンサートで「雲鼓よ！私はあなたのように生きたい！」と叫んだでしょうか。些か品位に欠けてきたので次は「坂本権平」にしましょう。高知の空の玄関は「高知龍馬

こもりうた ②②

空港」でなく「ゴンベエ空港」と名付けられたのでしょうか。2010年の大河ドラマが『ゴンベエ伝』だったとしたら、福山雅治はどのように主人公を演じたでしょう。彼が近江屋で絶命するシーンを見て、かのファンは「ゴンベエー！」と涙ながらに絶叫するのでしょうか。龍馬は「龍馬」だったがゆえに、今の世も広く人々に愛されているのではと思うのです。

「名」は、自身に全く決定権はなく、親等の趣味嗜好、占い、加持祈祷、時には一瞬の思いつきで決められたりします。どん



な名であれ、己に物心がついた時には既に馴染んでいるのでありがたいものです。

かくいう私も息子の名付けをする際、朝な夕な考える事もなくサクッと命名しました。命があるうちの名、そう考えると「もつと熟考するべきだったか」と今になって反省したりもします。将来息子には「練りに練ったのだ」と言うつもりですが。ちなみに息子も「龍」がついています。

龍馬で遊んでしまいましたが、決して疎かにしての事ではありませんので、龍馬ファンの方々はお怒りにならぬようお願い申し上げます。京都霊山護国神社の龍馬のお墓をお参りした事も、近江屋跡や土佐藩邸跡の石碑、伏見の寺田屋を拝みに行った事もあります。なつかしく思い出しながら、没後百五十年の祥月のご供養とさせていだいたつもりです。どうかご容赦。

『私説法然伝』(22)

法然誕生⑥

先月号では鳥羽法皇の崩御、保元元年における歴史的状況を書きました。今月はその続きになります。

【藤原摂関家の権勢は藤原道長・頼通親子時代に頂点を迎えていたが、院政期にはその力を落としていた。諸説あるが白河法皇の父である後三条天皇による親政の最大の特徴は「延久の荘園整理令」と呼ばれる記録・荘園券契所を設置した一連の改革によって藤原摂関家の経済的基盤であった各地の荘園をいくつも失ったことによるものである。そして白河帝院の御代より本格的な院政期に入ると復権の機会を完全に失う事になった。

白河院政期から鳥羽院政期にかけて「氏の長者」として藤原摂関家を率いていたのが藤原忠実卿である。忠実卿は叔父である興福寺別当の覚信の罷免問題を取りなそうとして白河院の怒りを買うことになり、

若くして藤原摂関家を継ぎ復権を目指そうとしていた矢先に政務への関与の一切を拒否されることとなった。その後も白河院時代はまさに不遇の時代を過ごすこととなる。ついには白河院の逆鱗に触れ、息子の藤原忠通卿を氏の長者とし、忠実卿は宇治にて蟄居となってしまう。だが鳥羽院政のはじまりと共に内覧(天皇に上奏される文章を先に見ること・役職の一つとして摂政・関白が内覧の宣旨を受けることが多い)となり政権に復帰を果たす。だが、関白職は息子の忠通卿が勤めている。その関係は次第に悪化していくこととなる。忠通卿に実子がなかったため、忠実卿は忠通卿の弟となる藤原頼長卿を忠通卿の養子とする。だが、忠通卿に実子の藤原基実が生まれると我が子に藤原摂関家の氏の長者の地位と関白職を継がせたく思い、忠実・頼長親子との関係性は悪化し最悪の状況となった。

不遇の時代を過ごした忠実卿の悲願はただ一つ藤原摂関家の復権であった。その為には二つ重要となる点があった。一つは天

皇の外戚となることで、これは娘の泰子が鳥羽上皇の后となることで達成できた。もう一つは権力の集中化である。その為には忠通卿では心許なかった。後に「悪左府」と呼ばれるほど苛烈にして妥協を知らない性格でありながら甥となる天台座主慈円から「日本一の大学生」と評されるほどの学識の高さを誇った頼長卿の存在が不可欠だと考えた忠実卿は何とかして頼長卿に政治的な実権を握らせたかったに違いない。

だが忠通卿からしたら、自分を退けようとする父のやり方には不信任を抱かざるをえなかったであろう。やがて決定的な事件が起こってしまう。」

以下次号に続く(征阿)



藤原忠通

工夫して多くの栄養を

何年か前に葬儀の役僧を依頼され葬儀会場へ行くと、寺院方駐車スペースに軽トラックが止められていました。どこかの爺さまが間違えて止めたに違いないと私は思い控室に入ると、M君の軽トラであることが判明しました。M君はお寺の住職ですが、何年か前に「米作り」にめざめ、年々作付面積を拡張し、田植え機、中古の軽トラを購入し、今では食べ盛りのお子さん4人が食べてもお寺のバザーに出せるほどの収穫量があるそうです。私も早々彼の今年の新米をいただき、贅沢に精米をして新米の味と香りを楽しませていただきました。新米にときめくのは、日本人の「血」でしょうか。



小学生の頃の夏休み、母が突然、「今日から我が家の主食は、お米からジャガイモにします!」と言い出しました。この種の発言は母にとって珍しいことではありません。つまり、おかずに関しては朝お味噌汁を作りと今迄通りですが、三度三度ご飯の代わりにジャガイモを食べるわけです。茹でたり、油で揚げたりと色々な方法でジャガイモをご飯の代わりに食べました。母の気まぐれは10日間で終わりましたので「ほっと」したことを覚えています。

ここで母が私に何を教えたかったというと、

主食は「お米」だけではないということです。当たり前のように奥が深いのです。

江戸時代以前は、一部の富裕層を除き、お米を1年中食べることはできなかったでしょう。現在より収穫量ははるかに少なかったでしょうし、保存するのも難しかったです。夏になれば麦やサツマイモが主食となり、新米が収穫できるまでの間、粟や稗、蕎麦も食べたでしょう。昔の人は、新米を収穫できる日を今の我々よりもずっと強く楽しみにし、それがDNAで受け継がれているのでしょう。

最近、炭水化物抜きダイエットが話題になっています。それが良いことなのか私にはわかりません。昔の日本のように、季節ごとに主食が変わったことで現在より多種の栄養素や食物繊維を摂取できたことは想像できます。現代ではこれを1日の3食でさまざまな主食を摂るようにしてみてはどうでしょう。例えば、朝食は玄米のお粥。昼食はかけ蕎麦。夕食は麦飯のとろろご飯。私がよく食べるパターンです。

母は、朝のお味噌汁の味噌に対しても同じ考えを持っていました。豆味噌、米味噌、麦味噌のローテーションで毎日お味噌汁の色が違いました。「豆味噌の日は具に豆腐と油揚げは使っちゃいけないよ、みんな豆が材料だから」と教えられました。

母はパンを主食と認めず、学校給食でも絶対食べませんでした。生徒の手前どうしていたのでしょうか。想像はつきますけど… 俊徳丸

布施行

「この間、片側二車線の道路を走ってたんだ」

「うん」

「そうしたら、先の方で道路工事をやってて車線規制してたの」

「ああ、そう」

「だから、みんな、規制されてない方の車線に列をなしてたわけ」

「その状況、分かんなくてもいいけど、それって、日本だけじゃないの？他所の国なんか、おかまいなしで両車線で進んで行き、最後に普通に合流するぞ」

「国民性か・・・まあ、それはいいとしてだな、一台の車が、先で規制されている方の車線で来たんだ」

「何十台と『ごぼう抜き』にしてか（笑）」

「ああ。で、よりによって、私の前に入ろうとするわけ。まあ、ちょうど私のすぐ先で、規制してたからそうだったんだけど」

「そうか、それは残念だったな（笑）」

「いやいや、別に私は何とも思わないよ。【布施の精神】で、自分が進むべき道を相手に譲

ったさ」

「布施の精神？エラそんなこと言って・・・

布施の精神ということはだな、譲った相手から【ありがとうハザード】が無かったとしても、イラつとしない、ということだぞ」

「ああ、もちろん。その車、当たり前のよう

に私の前に入ると、その、【ありがとうハザード】とかいうのも、つけないで進んでいったよ。私は、別に怒りが沸いてきたりはしなかったよ」

「そうか・・・人間ができているんだな。俺なら怒りまくって、そこから後ろにピツタリつけて煽りまくるよ（苦笑）」

「いや、私はいんだよ、私は」

「どういうこと？」

「いやあ、その車を入れたことによって、私の後ろのトラックが思い切りクラクションを鳴らしてきたんだ。十秒以上鳴らし続けてたよ・・・」

「えっ？それは、入れたキミに鳴らしたの？

それとも、インチキして割り込んだ車に鳴らしたの？」

「そんなことは分かんないよ・・・ただ、布

施行をするにしても、相手、というか第三者を不愉快にさせてしまう布施行があるということに気づいたよ」

「不愉快って・・・それは勝手にトラックの運転手が怒っただけだろ・・・キミは何ひとつ悪いことはしていないよ」

「うーん・・・それでも、トラックの運転手を不愉快にさせたことは間違いないことだもんな・・・それに、クラクションで意思表示しなくとも、『何で入れるんだ！真面目に並んでる俺らはどうなる？』って、心の中で怒ってる人もいるだろうし、『そこで入れると、クセになって、そいつまた同じインチキを繰り返すぞ。そいつの為にやらんぞ』って怒ってる人もいたかも知れないもんな・・・【沈黙の怒り】にも意識を向けなきゃな・・・」

「でも、それを言うなら逆もあるかも、だぞ。『おお、優しい人だ。よく入れてあげた』という称賛の声もあったかもよ」

「・・・」

（露の身）

頭の良い和尚がいた

歴史は面白いですね。明確な史料と、はつきりしない部分の継ぎ目の所に想像力がかき立てられます。

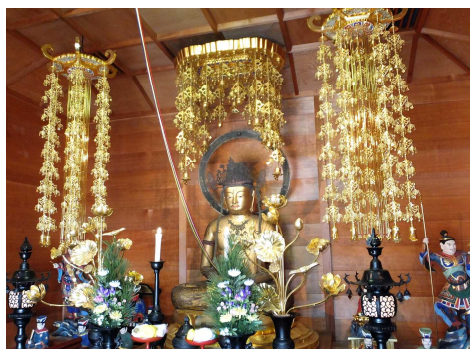
徳川家綱治世の寛文六年（1666年）、美濃國石原村の醫王山代護寺の境内に本堂とは別にもう一つお堂が建立され、高さ四尺五寸の大日如来坐像が安置されました。この時、第五世の住職であつたよう（養の右に良）圓上人は遷座の由緒を板に漢文で墨書し後世に残したのでした。

時は流れて大正時代、岐阜県の歴史学の碩学が一堂に会して『山縣郡誌』という郷土史誌が編纂されました。この中に、この佛像に関する記述があり、山号寺号の字が江戸時代のいつの頃からか、以應山醍醐寺と変わった由来も読み解けるのです。

「往昔醍醐山安養寺（春近村大字森）の佛像なりしが、應仁中該寺滅亡後、土中に埋没せしを寛文六年三月、養圓なるもの発

掘して、寺中に一字を建立し、安置したるものなり」

（遠い昔、醍醐山安養寺（春近村大字森）の佛像であつたが、應仁の乱の最中にその寺が滅亡した後、土の中に埋まつていたのを寛文六年三月、養圓とかいう者が発掘して、境内にお堂を一つ建て、安置したものである）



應仁の乱は、1467年に始まって1477年まで。もし木造彫刻が土中に二百年間も埋まつていたら、ボロボロでしょう。それに、「養圓なるもの」とは、いかにもえらそくな書き方ですが、記述内容は上人が残したものの丸写しです。

安置当時は、諸宗寺院法度（1665年）で寺院を序列づけ、本末制度を整えさせて、僧侶の心得や儀式の作法、衣服に至るまで寺社奉行が細かく統制していた時代です。

隠匿されていた佛像をもし不用意に公表すれば、誰かに盗難の疑いがかかる恐れが無きにしもあらず。とは言え、平安時代後期の作と判る立派な佛像、どうにかして大勢にお参りしてもらいたい。そこで、土を掘ったら、應仁の戦乱で滅亡したお寺のご本尊が出てきた。みんなでお祀りしたいと役所に届け出ると共に、由緒を記して残しておく。そう考えたと思うのです。

墨書の中に出てくる「大日弥陀異名同体」（大日如来と阿弥陀如来は名前は異なるが同じ方）の意味が不明でした。

今年、真言宗薬園寺のご住職北野宥範師から教わりました。真言宗では阿弥陀如来を大日如来と申し上げ、念佛を称える行を鎌倉時代から続けてきたと！

大日如来像の開眼供養から今年がちょうど三百五十年の節目の年。十一月三日には、大柴燈護摩供養を厳修いたします。

「養圓上人、どうぞお見守りください」

観経物語(99)

正宗分(しょうじゅうぶん) その53

第十一勢至観(せいしがん) その3

《本文その3》

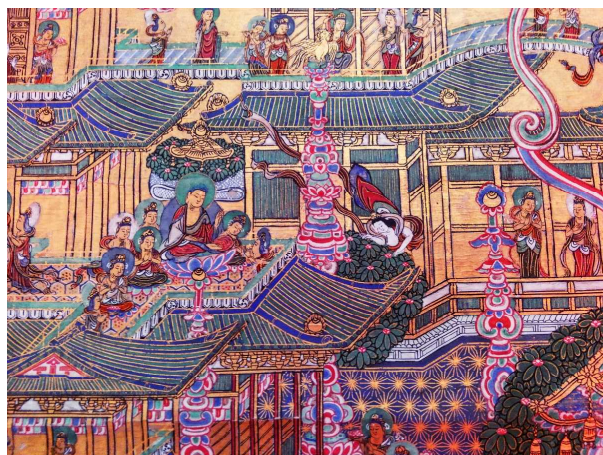
この菩薩が(歩)行する時、十方の世界は、一切に震動する。地の動く処に当たりて五百の宝華ありて、一々の宝華は莊嚴高く顛れ、極楽世界の如し。この菩薩の坐したまう時、七宝の国土は一時に動揺し下方の金光佛刹より乃ち上方の光明王佛刹に到る。其の中間に於いて、無量塵数の分身の無量寿佛、分身の觀世音、大勢至、皆、悉く極楽国土に雲集す。空中に側塞し、蓮華座に坐して、妙法を演説し、苦の衆生を度す。

《意味・訳文》

この(勢至菩薩)が歩行するときには、十方の世界は、いっせいに震動する。その震動する大地の上には五百億の宝石の花が開く。その一つ一つの宝石の花は、莊嚴で気高くきらびやかであり、あたかも、極楽

世界のありさまを想わせるものがある。

(また)この菩薩が坐したときには、七つの宝石からできた国土は、いっせいに震動する。その動揺は、下方の金光佛の国から、上方の光明王佛の国にまでおよび、その中間(あいだ)に、無量の塵の数ほどの、多



くの分身の無量寿佛や、分身の觀世音菩薩や、大勢至菩薩が、すべて極楽国土の雲のように集まり、空中に満ち満ちて、蓮華の台座に坐り、優れた説法を説き、苦のうちにある衆生を済度(救済)しているのである。

《私訳》

極楽国土は浄土です。つまり悟りの世界です。それなのになぜ、ここで苦の衆生という言葉がでてくるのか、と言う疑問を持つ人があるかもしれません。これは今回の《本文》の文面をよく読めば、勢至菩薩が坐したとき、勢至菩薩の分身すなわち、菩薩が教化のためにいろいろな場所(随所)に阿弥陀佛や觀音菩薩のそれぞれの分身と共に出現され、苦の衆生を救いとれらるると言っているところからすると、極楽に苦の衆生が存在するわけではないと断言するのではない。また仮に苦の衆生が極楽に居たとしたら、それは極楽に生まれる前の世(前世)で苦の衆生と呼ばれていた者のことを言っているのではないかと思えます。なぜかと言うと、前々回(97回)で、勢至菩薩は一切の衆生を照らして、苦の境涯から離れさせる衆生済度の菩薩であると、釈尊は言っておられるのですから、極楽浄土に生まれた衆生は既に苦から離れていると言えるのです。

《幽思房》